
それが正解

公彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが正解

【Nコード】

N 6 6 3 2 I

【作者名】

公彦

【あらすじ】

夏休みのある日、海にやってきた大学生の猪狩康平、矢式奈美香、藤井基樹、新川怜奈の四人。その晩、ホテルで女性が死体となって発見される。現場は密室。彼らは、たまたま知り合った探偵・真崎と共に事件に挑む。

登場人物

登場人物

・O大の学生

猪狩康平

いかりこうへい

やしきなみか

矢式奈美香

ふじいもとき

藤井基樹

にいかわれいな

新川怜奈

O大二年

O大二年

O大二年

O大二年

・ホテルの客

真崎和哉

まさきかずや

秋山美冬

あきやまみふゆ

尾崎駿介

おざきしゅんすけ

中井夏美

なかいなつみ

武井嘉男

たけいよしお

武井紀子

たけいのりこ

探偵

OL

フリーライター

H大二年

自営業。

主婦

・その他の人々

林拓馬

はやしたくま

高石貴裕

たかいしたかひろ

大竹

おおたけ

竹口

たけぐち

ホテルのオーナー

ホテルの従業員

刑事

刑事

ブローグ

「海に行こう！」すべてはこの一言から始まった。

午後八時。ここは居酒屋の一室。猪狩^{いかりこうへい}康平、矢式^{やしきなみか}奈美香、藤井^{ふじいも}基樹^{とき}、新川^{にいかわれいな}怜奈が集まっていた。彼らは〇大の二年生である。彼らが友人となった経緯は定かではない。ただ、暇があれば四人集まって飲んでいるわけである。

そして、ビールジョッキ片手に「海に行こう！」と言い出したのは藤井基樹である。

「どうせなら泊まりだ」誇らしげに藤井が言う。

「お、いいねえ」そう言ったのは矢式奈美香。焼き鳥に手を出す。

「いつ？」新川怜奈が聞く。

「いつでも。なんてったて夏休みだからな。」藤井が答える。

「どこに？」ビールを飲みながら聞いたのは猪狩康平。

「海」当たり前だといわんばかりに藤井が答える。

「いや、だからどの？」呆れたように猪狩は聞く。

「うん。どうすっかな」藤井は石焼ビビンバを皿に盛っている。

「あ、私いいところ知ってる」と怜奈。「伯父さんがやってるところなんです、浜辺が綺麗なんだって。安くしてくれると思うよ」

「おっし、それ！」奈美香が大声で言う。

「それでいいんじゃない？」猪狩も賛成する。

「うん、じゃあ聞いてみる」怜奈が答える。

「よし、じゃあ飲みましょ」奈美香がビールジョッキを高々と挙げる。

「今までも飲んだ」猪狩がボソツと言う。

「うるさい！あんたもつと飲みなさいよ！」奈美香はビールを猪狩の前に突き出す。

プロローグ（後書き）

はじめまして。初小説です。文章的にもトリック的にもまだまだですが、どうかよろしくお願いします。

一章 急展開する事件の展望と停滞する本来の目的について

1、

八月八日、奈美香はJR、S 駅の改札前にいた。三日前の飲み会の翌日、怜奈からメールがあり、部屋を取る事ができたという。海に行くのも泊まりに行くのも数年ぶりなので、この二日間で必要なものを買って今に至る。

奈美香が駅に着いたとき既に猪狩がいた。彼は必ず一番早くに来る。時間に厳しいというわけでもない。他人が遅れても（それが常識の範囲内であれば）特に何も言わない。そして、基本的に時間を守るのは猪狩のみである。実は奈美香も三分の遅刻である。ただ、この程度の遅刻をとにかくいう人間の方がめずらしいだろう。

「いやあ、ごめんごめん」奈美香はとりあえず謝る。

「いや、べつに」猪狩の返事は素っ気ない。朝は（といっても今は十時で、猪狩以外からすれば朝というわけではない）いつもこうである。奈美香と猪狩は小学校から同じなので、慣れている。そして昼になっても機嫌の悪さが直るだけで無口なのは変わらない。そして、歳を重ねることに無口になっていつているようである。

「ごめん、遅れた！」怜奈が近づいてくる。笑顔であり、それは彼女なりの謝罪の仕方である。

「いや、いいよ。おまえは。あいつのタチが悪い」猪狩が不機嫌そうに言う。あいつとは藤井の事である。彼が一番時間にルーズである。「ははは……」怜奈が苦笑いする。そのあと藤井がやってきたのは十時半を過ぎていた。

彼は何も気に止めているようではなかった。

「何のために待ち合わせの時間があるのか分かったもんじゃない」猪狩は藤井に聞こえない程度に呟いた。

2、

S 駅から電車で数時間、ようやく着いた観光街。駅からバスに乗り十五分ほどで海についた。バスを降りると潮の香りが鼻をつく。「すごい……」奈美香がつぶやく。奈美香は観光客の多さと海の景色に圧倒される。澄んだ青が太陽の光を受け、まぶしさを感じる。「人多すぎ。場所ねえじゃん」藤井が言う。台詞とは裏腹に表情は明るい。

「今日は土曜日だ。どうせ休みなんだから平日に来ればよかったのに」猪狩がぶっきらぼうに言う。

「あ……そうだね」怜奈が申し訳なさそうに言う。

「あんた、そういうこと平気で言うんじゃないわよ！ せっかく怜奈が部屋とってくれたのに」奈美香は猪狩の頭をコツンとたたいた。「いてっ……わるい」猪狩は素直に反省する。

「いいじゃん、活気がある場所の方が」と藤井。

「それにしてもよく部屋とれたわね」奈美香が怜奈に尋ねる。なにせ今は繁忙期の真ただ中である。一日や二日前に予約が取れるとは思えなかった。

「えっとね、あれのせい」怜奈が進行方向とは逆の方を指して言う。三人が振り返って見ると巨大なホテルが建っていた。そういえばバスから見えていたなと奈美香は思った。

「あれのせいで客が引いちゃったらしいんだよね。もともと小さいところなんだけど」

3、

海辺を左手にしばらく歩く。浜辺は観光客でいっぱいである。しばらくすると怜奈が

「あ、ここよここ」と言って立ち止まる。

そこは、ホテルと言うよりはペンションに近いといえる小規模なものだった。ただ、二階建てのその建物は年季こそ入っているがまだまだ健在という感じだった。

扉を開けるとジャラジャラと音になる。扉に鈴が付いている。口

ビーは割りと広く、目の前にはカウンター、右手には大きなソファーがありくつろげるようになっていた。左手には扉があり、少し開いていた。中を見るかぎり食堂のように見える。

カウンターの横に通路があり、「ゆ」と書いた暖簾がかかっている。どちらかといえば洋風のこのホテルには似つかわしくなく滑稽に見える。カウンターの奥に扉があり、事務室になっているようだ。ちよとそこから男が出てきてこちらに歩み寄ってくる。

「久しぶり、怜奈ちゃん」

「こんにちは伯父さん。今日はありがとうございます」どうやらオーナーのようである。怜奈が礼儀正しくお辞儀をする。

「いやいや、こっちの方こそ。向こうにホテルができてから結構厳しくてね……。」「オーナーは苦笑いする。そして猪狩たち三人の方を見て自己紹介する。

「オーナーの林です。どうぞ宜しく」三人もそれぞれ挨拶をする。

「えっと、君たちの部屋は二階だから。はい、鍵」四人はそれぞれ鍵を受け取る。彼らは二階へと向かう。ロビーの右に通路があり手前左側に階段、奥には左右に三部屋ずつ、計六部屋あった。二階には左に四部屋、右に四部屋。四人の部屋は左の四部屋で猪狩が左角の二〇五号室、藤井はその手前の二〇三号室。その向かいが怜奈の部屋で二〇八号室、右角が奈美香の二一〇号室である。四と九は無いらしい。

「さて、もう十二時だけどどうする？」藤井が聞いた。

「お昼食べて、海！」奈美香が元気良く答える。

「OK。じゃあ飯食ったらそのまま海行くって事で。準備して行くぜ。」藤井がそう言って自分の部屋に入ってしまった。

猪狩は部屋に入って荷物を降ろす。中にはベッドと椅子、テーブルがありテレビがついている一般的という言葉が似合う部屋だった。一泊なのでクロゼットに着替えを入れる必要はないだろうと考える。海に入るのは面倒だから海パンは置いていこうかと思ったが、文句

を言われるのは明らかなので一応持つていく。

部屋を出ると三人はすでに準備を済ましていた。鍵を閉めて四人で歩き出す。奈美香はかなりハイテンションである。早く海に行きたいのだらう、駆け足である。

「ガキくさ……」猪狩は聞こえないようにつぶやく。怜奈には聞こえたらしくクスクスと笑っている。藤井には聞こえなかったようだ。なぜなら彼も異様にハイテンションである。この四人組は奈美香と藤井がアウトドア派、猪狩と怜奈がインドア派とはつきり別れている。

先頭を行っていた奈美香が階段のところで男とぶつかった。奈美香が尻もちをつく。

「いたた……」

「おっと、ごめんよ。大丈夫かい？」男は奈美香に手を差し伸べる。男は二十代後半くらいだろうか、すらつとした体型で整った顔立ちでいわゆるイケメンという感じだった。

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます」奈美香が男の手に引かれて立ち上がる。

「そう。じゃ、気をつけて」そういうと男は右に曲がり、右手前、つまり二〇二号室に入って行った。

「ねえ、あの人がカッコ良くない？」奈美香が聞いてきた。

4、

階段で三十代くらいの男とすれ違い、ロビーには二十代くらいの女性がいたし、玄関では中年の夫婦とすれ違った。巨大ホテルの影響で客が少ないと聞いていたがそれでもそれなりに、やっているようだ。

どこで昼食を食べるかという話になり相談の結果、適当に海の家を見つけて、という事になった。どこも混んでいたが歩いて三分ほどでちょうど四人分の席が空いた店を見つけた。そろって焼きそばを注文する。

昼食を終えると今日のメインイベント、海である。着替えると奈美香と藤井が一目散に海へ飛び込む。さながら小学生だと猪狩は思ったが、怜奈も嬉しそうに飛び込んでいったのでこういうものなのだろう。思ったことに関して自分が他人と違う感性を持っている事を猪狩は自覚していた。ちなみに猪狩は海が嫌いではない。海にさえ入らなければ。泳げないわけではない。ただ、泳ぐという行為に楽しみを見いだせないだけである。正確に言えば泳ぐだけではないのだが。

「海、入らないの？」怜奈が海から上がって話しかけてきた。

「うん、疲れるから。あいつらが入れって言うまでは」

「猪狩君らしいね」怜奈は微笑む。

「康平！！ あんたもこっち来なさい！！」奈美香が海から叫んでいる。

「さっそく呼ばれたね」怜奈がもう一度微笑む。「行こっか」

「うん」猪狩が立ち上がる。「やれやれ」

午後四時。さすがに遊びつかれて、さらには海の水も冷たくなってきたのでホテルに帰ることにした。途中のコンビ二で酒を買おうという話になった。といってもホテルは浜辺からすぐであるのに対してコンビ二は一度大きい道路に出なくてはいけないので遠回りである。

ホテルに着いたのは五時少し前。夕食は七時からなのでまだ時間がある。四人はとりあえず自分の部屋に戻った。

猪狩はベッドにうつ伏せになった。何もする事がないので本でも読もうかと考える。

ドアをノックする音がする。

「康平、入るわよ」奈美香の声だ。

「どうした？」

「暇だから藤井の部屋でゲームしないかだって」

「別にいいよ。行こっ」

5、

藤井の部屋では、ババ抜きや大富豪をやったが圧倒的に奈美香が強かった。他の三人は大富豪では横一線だったがババ抜きでは猪狩が圧倒的に弱かった。

「昔からこれは嫌いなんだ」猪狩が不満を漏らす。「運の要素が強すぎる」

「あんた、昔から運悪かったからね」と奈美香。猪狩は何か言い返したかったが言葉が出てこなかった。

あつという間に時間は過ぎ七時になった。別に修学旅行ではないので時間きつちりに行く必要もないが、トランプも飽きてきたということで食堂へ向かう事にした。

食堂は一階ロビーの左側にある。食堂に入ると何人かの客はすでに来ていた。

「あ、あの人」奈美香が指した方向には昼間彼女とぶつかった男が座っていた。かっこいいと言っていた男である。彼はこちらに気づいたようでこちらに向かって微笑んだ。奈美香はそちらに向かう。

「あの、ここ、いいですか？」奈美香は笑顔で聞く。

「うん、いいよ。君たち大学生？」

「はい、矢式奈美香っていいいます。〇大です。」

「へえ、〇大か。頭いいね。僕は真崎和哉っていうから。よろしく矢式さん」

三人も自己紹介をする。その後はもっぱら奈美香が話していた。

「真崎さんって何のお仕事をしているんですか？」

「うーん、まあ一応探偵やってるけど……」真崎が歯切れ悪くいう。猪狩はテーブルの向こうで食事をしている女、今日出かけるときにロビーで見た女だが、彼女がこちらを見た、気がした。

「えー？　すごいですね。やっぱり殺人事件とか解いちゃうんですか？」奈美香は目を輝かせている。階段で会った男も興味深そうに

こちらを見ている。これだけ大声で探偵だの殺人だの言っていれば注目を集めてしまうのは無理もないだろう。

「いや、そう思うでしょ？　だからあんまり人に言いたくないんだよね」真崎は苦笑する。「そういうのは小説の中のお話さ。警察が探偵を頼る事なんてないよ。本来の仕事は素行調査とか浮気調査とか、あと人探しとか。まあ大体が浮気調査なんだけど」

「へえ、そうなんですか……」奈美香はちよつとがっかりしたようだ。

6、

食事の後は風呂に入った。小さなホテルだが温泉が付いていてなかなか立派だった。

猪狩と藤井が湯船に入っているとやや遠くで真崎と男が話しているのが聞こえた。たしか、階段ですれ違ったなと猪狩は思った。

「あんた、探偵なんだって？」男が聞く。

「はい、そうですけど……えっと」

「ああ、悪い悪い。俺はフリーのライターをやってる尾崎っていうんだ。最近あまりいいネタが無くてさ。」

「なるほど、で、僕が探偵だって聞いて記事になると思ったんですね？　でも本当に何もありませんよ」

「いや、そんなことはないだろう」

「いや、まあ」

真崎は一度言葉を切る。

「死体に遭遇した事は何回がありますよ」

猪狩は風呂から上がった。真崎と尾崎の会話が聞くに耐えなかったからだ。藤井は少し興味深そうにしていたが、すぐに上がってきた。

「わあ、グロ……」藤井が手を掃う仕草で言う。

「まあ、後でもっと凄い話になるんだろうな」

「まさか、あれ以上はごめんだぜ。聞かなきゃいい話だけど」

更衣室から出るとちょうど奈美香と怜奈も出てきた。もう一人大學生くらいの女が一緒だ。

「あ、康平。えっとねこの娘、中井夏美ちゃんっていうの」奈美香が紹介する。

「よろしく！」中井はにつこりと微笑む。

「よろしく。えっと、一人で来たの？」藤井が聞く。

「うーんと、来たのは一人んだけど、彼氏がここでバイトしてるから」

猪狩は藤井が一瞬うなだれたのを見逃さなかった。それにしても従業員がいたのか。良く考えたらいくら小さいとはいえオーナー一人で何とかなるもんじゃない。もちろん奥さんもいるだろうし、子供がいるかは知らないがバイトの一人や二人いてもおかしくないなと納得した。

「じゃあ、後でね」そう言つて中井は奈美香と怜奈に手を振り、一〇一号室に入つていった。

「さて、これからどうする？」藤井両手を挙げて伸びをしながらが聞く。

「え？ 飲むんじゃないの？」と奈美香。

「おお、そうだ。じゃあ、俺に部屋に酒があるから、そこで」藤井が答える。

階段を上ろうとしたとき、どこからかベルのような音が聞こえてきた。

「何？ 何の音？」怜奈がびつくりした様子で聞く。

「あの部屋かな？」猪狩が指を指す。左奥の部屋、一〇三号室である。

「あれ、何の音かな？」四人が振り返ると、風呂から上がった真崎と尾崎がいた。話しかけてきたのは真崎のほうである。

「うるさいな」尾崎が部屋の方へと歩いていく。「おい、うるさいぞ！」扉をノックするが反応がない。

「いないのかな？」怜奈が首をかしげる。「誰の部屋かな？」

「鍵は？」猪狩が聞く。

「掛かってるぞ」

「オーナーに言っただけ鍵を開けてもらいましょか。人の部屋にはいるのは気が引けるがこれじゃあ、うるさすぎる」真崎が提案した。

「あ、私行つてきます」奈美香が走っていく。

「なんか、目覚まし時計みたいだな。」藤井が独り言のように言った。

ロビーからオーナーと奈美香が歩いてくる。

「うーん、お客さんの部屋に勝手に入ったら駄目なんですけどね…」

…」オーナーは渋い顔をする。

「そんなこと言ってもこれじゃあ迷惑だろ」尾崎はかなり気が立っているようだ。

「仕方ないですね」オーナーが扉に近づきマスターキーを差し込む。キーを回しカチツという音がする。そしてオーナーが扉を開ける。

そして、誰もが絶句した。

7、

部屋に入ると真っ先に視界に入ってくる。女性がうつ伏せに倒れているのだ。その背中には刃物が刺さり、血がにじみ出ている。いつの間にか音は止んでいた。

怜奈が短い悲鳴を上げた。目をそらしロビーの方へ走っていった。奈美香は一瞬も目を逸らさなかった。そして何を思い立ったか足を一步踏み出す。

「おい！？」猪狩が驚いて叫ぶ。しかし、彼女は足を止めない。一步、また一步。

なぜ、歩いているか自分でもわからない。ただ、何かを確認したかった。死んでいる事か、あるいは死んでいない事か。自分ではどうしようもないことはわかっていた。これは単なる好奇心か。

「入らないで！！」真崎が叫び、彼女を引き止める。そこで奈美香

は冷静になった。

「まだ生きているかもしれないけど、現場は荒らさない方がいいだろう」真崎は今までになく真剣な表情をしている。しかし、誰も生きているとは思っていないだろう。素人目に見ても出血がひどい。

真崎が倒れている女性の方へ向かう。しゃがみこんで何かをしている、脈を測っているのだろう。手馴れている。

「オーナー、警察を呼んでください。救急車は、そうですね、呼んでください。でも、無理でしょう」

オーナーは天を仰いだ後、ロビーへと歩いていく。死者への冥福を祈ったようにも、自分のホテルで死者が出たことでの落胆にも見えた。

真崎はテーブルの上のあるものに気がついた。ポケットからハンカチを取り出した。それはたたまれてはおらず、くしゃくしゃになって入っていたようだ。意外にズボラなところもあるのだなと思った。一体何を考えているのだろうか？ そう思い思考を元に戻す。彼はハンカチでテーブルの上のあるものをつかみ、振り向き、それを入り口に立っている者たちに見せて言った。

「鍵だ」

二章 転回する彼の思考と展開される彼女らの好奇心について

1、

数十分後、ホテルは警察関係者で埋め尽くされた。被害者の部屋はもちろん、ロビーまで警官だらけとなった。

猪狩たちホテルの客は、ロビーで待機するように言われている。

四人はソファーに腰掛けている。

「殺された女の人、誰？」藤井が聞いてきた。怜奈は気が動転しているのだろう、ずっとうつむいている。

「さあ、ホテルの中では何回か見たけど」猪狩が答える。

「あたしも知らない」奈美香は怜奈のほうを見る。二人の視線も集まる。

「なあ、休ませた方が良くないか？」猪狩が藤井に聞く。

「ああ、聞いてくる」藤井は近くの警官の方へ歩いていった。さて、どうしたものか。

奈美香は先ほど起こった不可解な現象について考えていた。しかし、思考がまとまらない。こういった事態は小説の中だけだと思っていた。実際に起こってみると異常なほどの緊張感を感じる。人の死という現実が自分の身体を縛り付けている。この中で平気で推理を展開できる名探偵たちは、やはり小説の中の人物なのだと実感する。しかし、それでも気になるものは気になるのだ。深呼吸をして落ち着こうとする。

そうしているうちに藤井が歩いてきた。

「部屋で休んでいいってさ。あとで話を聞きに来るってさ」

「そう。怜奈、大丈夫？」奈美香は怜奈の顔を覗き込むように言った。

「うん」怜奈は小さな声で答えた。決して大丈夫には見えない。奈美香は怜奈に肩を貸して部屋に連れて行った。

四人は怜奈の部屋に入った。怜奈はベッドの端に座り込む。奈美香はコップに水を注いで怜奈に渡してやった。怜奈はそれを少しずつ飲む。少しよくなったように見える。

「ありがと、奈美香」怜奈は奈美香に微笑む。若干の無理があるように思えたが、良くなっているようだ。

「無理するなよ」藤井が心配そうに声をかける。その時ドアがノックされた。猪狩が一番近かったのでドアを開ける。真崎だった。

「やあ、大丈夫かい？ 今、下の〇五号室で事情聴取やっているから。あとは君たちだけだよ。そのうち警察が呼びに来ると思うけど。じゃあ、お大事に」そう言って微笑むと真崎は部屋から出て行った。

「真崎さんって良い人ね。こういう気遣いができる人っていいわあ」奈美香は嬉しそうに言う。

しばらくすると警官がやってきた。どなたからでも、ということで猪狩が最初に行く事にした。

2、

猪狩が〇五号室に入ると、警官が二人いた。一人は三十代くらいで背が高い。がっちりとした体格で、もう一人は五十代くらいだろうか。若干白髪混じりで小柄だ。二人とも椅子に座っている。部屋に椅子はひとつしかないからどこからかもって来たのだろう。

「すいませんね、お手数をおかけします。道警の大竹と申します」若い方の男が愛想よく言う。「どうぞおかけになつてください」猪狩は言われた通りに椅子に座る。

「ええと、まず、殺された被害者と面識はありましたか？」

「いえ、ないと思います」

「思います、と言うと？」

「顔を見てないんで。名前も顔も知りません」

「ああ、失礼しました。」そういうと大竹はテーブルの上のファイルから写真を取り出す。「こちらです。秋山美冬さんというのです

が」

猪狩は写真を見た。ホテルに来てから何度か見た顔だ。海に行くときにロビーで見かけたし夕食のときも居た。

「いえ、ここでは何度か見ましたけど話もしていません」

「そうですか。では、事件が発覚したときの事を教えていただけますか？ 他の方の話だとあなたもいたそうですが」

「えっと、風呂から上がった部屋に戻ろうとしたら音が聞こえたんです。目覚まし時計みたいな。で、たしか尾崎さんでしたっけ、記者の人が扉をノックしたんですけど反応がなくて。うるさいから鍵を開けて中の様子を見ようって事になって、オーナーが鍵を持ってきたんです。あの音って何だったんですか？」

「時計ですね。隠されていました。いろいろと細工がされているようで、今調べています……」大竹は言葉を切った。喋りすぎたようでもう一人の刑事に睨まれている。細工がされていたということは、その時計が密室に必要なだったという事だろうか。

「鍵を開けたのはオーナーでしたか？」大竹は咳払いをして質問を再開した。

「え？ たしかそうでしたけど」

「その前に鍵がかかっているのを確認しましたか？」

「いえ……」

なるほど、警察は本当はあの部屋が密室ではなかったと考えているのだろう。でもたしか部屋を空けようとしたのは尾崎だったはずだ。二人が共犯でないかぎりそれはない。そもそも、本当に密室だったのか。猪狩は自分がいつもより積極的な思考になっている事に気づいた。

「窓の鍵ってかかってました？」猪狩は聞いてみた。

「……かかっていましたよ」大竹は少し渋い顔をした。あまりいろいろ質問するなということか。

「では最後に今日の行動について教えて下さい。夕方以降でいいですよ。」

「えっと、たしか海から帰ってきて七時まで友達と四人でトランプをしていました。それから夕食を食べて……七時半過ぎくらいから八時半くらいまでは自分の部屋にいました。それから風呂に入って出てきたところで終わりです」聞かれている事を答えているだけだが、いつもより饒舌だと自己分析する。

大竹はメモを取っている。年配の刑事はずっと考え込んだ表情だ。
「もういいですよ。ありがとうございます」

3、

怜奈はだいぶん良くなったようだ。自分もさつきより落ち着いてきた。奈美香はそう思い、ずっと思っていた事を口にしてみた。

「誰がやったのかしら？」二人は驚いたようだ。

「ああ、そういう話になるの？」藤井は苦笑いする。怜奈も驚きはしたようだが、興味をそられたようである。やはり、女子の方が強い世の中になったのだろうか考える。ちょうど猪狩が入ってきた。

「次、誰が行く？」猪狩が聞いてきた。

「じゃ、俺が」藤井が立ち上がり、部屋から出て行った。

「誰がやったと思う？」奈美香は猪狩に尋ねる。

「さあ、それよりどうやってやったか気になる」

「あ、たしかに」

「どういうこと？」怜奈が首を傾げる。彼女は鍵を見していない事に気がつく。

「ああ、テーブルの上に鍵が置いてあったのよ」奈美香が説明する。

「密室？」

「そういうこと」

「窓も？」

「あ」それはすっかり忘れていた。全く見ていなかった。

「かけてあったよ」猪狩が答える。

「本当に？」奈美香は猪狩に尋ねる。

「知らない。警察が言っていただけだから」

「本当に密室ね」奈美香がつぶやく。

「そうでもないだろ。鍵が二つあればいいんだから」

「あ、そうか」

「でも普通は部屋の鍵って一つじゃない？ あとで伯父さんに聞いてみるけど」

確かにホテルの鍵が二つ以上あるとは聞いた事がない。あとはマスターキーだけだろう。

「じゃあ、可能性は二つね。みんなの目を盗んでカウンターからマスターキーを盗んだか、外から何らかの方法で窓かドアの鍵を閉めたか」

「もう一つ、あの時、まだ犯人が中にいた」

「ありえる？」怜奈が首をかしげる。

「さあ、ベッドの下とか、クロゼットの中とか。でも可能性は低いよ」

「なんで？」

「警察が来るまで俺がずっと見てた。ロビーからだけど」

「うーん。じゃあ、やっぱりキーを盗んだか、外から鍵をかけたかね。でも、カウンターからキーを盗むのってかなりハイリスクじゃない？ 戻さなきゃいけないし」奈美香が言う。

「こんなところで殺す事自体ハイリスクだ」猪狩はそう言う立ち上がった。

「ちよつと、どこ行くのよ？」

「部屋。なんか馬鹿馬鹿しくなってきた。だって警察の仕事だろ、これ」そのまま部屋を出て行った。

「つまらない男……」奈美香は猪狩の後ろ姿を睨みながらつぶやいた。

「あれ、康平は？」入れ替わりで藤井が戻ってきた。

「部屋に戻っちゃった」怜奈が説明する。「さっきまで、密室の話で盛り上がったんだけど」

「なんだ、俺だけ仲間はずれ？」

4、

奈美香は警察の事情聴取を終え、一〇一号室の扉をノックする。わかったことは少ない。殺されたのは秋山美冬という女性でOLということだけだった。しばらくの間があり、中井夏美が顔を出す。「やつほ」奈美香は笑顔で小さく手を振る。

「ああ、奈美香ちゃん。入って入って」中井も笑顔で返す。

奈美香と中井は今日知り合ったばかりである。中井はH大の二年生である。先に話しかけてきたのは中井のほうで、互いにミステリー好きという事がわかって、意気投合したという経緯である。

「大変な事になったね」奈美香が話を切り出す。

「うーん、でも私見てないからなあ。奈美香ちゃん、見たんでしょ？」

「うん、ちょっときついわね」奈美香は苦笑いする。思い出すと寒気がしてくる。

「私駄目だわあ、きつと。こういうのは本の中だけにしてよ、って感じ」

「事件のとき、何してたの？」奈美香は思い切って聞いてみる。実はこれを確認しに来たのだ。

「なに、アリバイ確認？ うわあ、事件解決する気なんだあ？」中井は目を丸くする。「いいよいいよ。えつとね……いつ？」

「夕食のときはいた気がするのよね、殺された女の人。だから、その後」

「えつとね」中井の目線は天井を向いている。思い出そうとしているようだ。「しばらくは、食堂にいたかな？ 貴裕としばらく話して、仕事があるからって、彼厨房に引っ込んで行っちゃったから部屋に戻って、何時頃だったかなあ？ 覚えてないや。その後すぐお風呂に行ったよ。」貴裕とはここで働いている中井の彼氏の事だろうと奈美香は推測する。

「ふーん、じゃあ、彼には一部アリバイがあるのね。オーナーも一緒かしら？その辺は怜奈が聞いているかしら」

「がんばってね」

「なんの得にもならないけどね。好奇心って嫌だわ。わかっているのに止まらないもの」奈美香は微笑んだ。

6、

怜奈はカウンターの奥の部屋にいた。事務室のようなところである。

「まいったよ。ただでさえ経営が厳しいのに、殺人事件があつたなんて広まったらどうしようもないよ」オーナーの林はため息をつく。苦笑いすらできないようだ。

「伯父さん、大変ですね……」

「警察にもいろいろ聞かれるし、冗談じゃないなあ、こつちにはアリバイがあるのに……」高石君とずっと夕食の後片付けをしていたんだ」

怜奈はしめた、と思った。一番聞きづらかったことを自ら話してくれた。もつとも、怜奈は自分の伯父が人を殺したとは全く思っていない。

「なあ、高石君？」林は椅子に座ったまま首だけ後ろを向いて高石に同意を求めた。怜奈は彼が中井の彼氏だろうと思った。

「はい」とだけ高石は答えた。

「もう、早く犯人を捕まえて欲しいよ。でないと商売あがったりだよ」

7、

猪狩は自分の部屋に戻るところだった。階段を上っている途中で話し声が聞こえてきた。

「で、探偵としてはどう考えているわけだい？」真崎の部屋の前で尾崎が話しかけている。盗み聞きするのもどうかと思ったが、その

まま聞くことにした。何か事件について聞けるのではないかという期待があった。事件があつてから確実に思考が変化している。理由はわからない。

「なにも。僕の仕事じゃないですよ。」真崎は素っ気ないが微笑んでいるようにも見えた。

「そんなこと言わずにさあ」

「何を聞きたいんですか？」

「もちろん、犯人は誰か？ でも情報が少ないわな。とりあえず、密室のトリックかな？」

「さあ？ でも方法はいくらでもありますよ。誰にでもできます。僕にもアリバイはないですしね。あなたにもないでしょう？」

「まあな、自分の部屋で仕事をしていたからな」

「とにかく情報が少なすぎます。そして情報が増える事もないでしょう。僕は警察関係者じゃない。むしろ容疑者だ」

「まあ、そうだな」尾崎は舌打ちした。そして自分の部屋に戻ろうとする。

「そういえば、中年の夫婦、見ませんね」真崎が呟いた。

三章 集束する各自の調査結果と収束しない議論の結論について

1、

すでに十二時近かった。買ってきた酒も無駄になってしまった。

飲んでいたらまだ起きているだろうが、そんな気分ではなくみんな寝てしまったようだ。しかし、奈美香は密室の謎が気になり、目が冴えていた。色々な可能性がある。けれども、どれも弱い。

猪狩なら何か思いついているだろうかと思った。彼は昔から観察力や閃きが良かった。誰も気がつかないところに気がついたり、疑問を感じたりしていた。その度に「なんで、そんなこと気にするの？」とか「別にどうでもいいじゃん」などと言われていたから自然と喋らない事を覚えたのかもしれない。

彼のところに行こうか考えたが、もう寝ているだろうし、あまり興味がなさそうだったので無駄だろう。どちらにせよ今日はもう遅い。明日にしようと思ったとき、ふと真崎の事を思いついた。

「真崎さんなら、何か思いついているかも……」

まだ起きているだろうか、少し話を聞いてみたいと思った。そう決心して、奈美香は部屋を出た。

真崎の部屋は二〇二号室だ。寝ていて起こさないように軽くノックするが反応がない。

「寝ちゃったかな？」諦めて部屋に戻ろうとする。

「あれ、どうしたの？」真崎が階段を上ってきた。手には缶のコーラを持っている。それを買に行っていたようだ。

「あの、少しお話がしたくて。事件の事なんですけど……」奈美香は上目遣いで話す。

「うーん、前も言ったけど探偵ってそういうことはしないからなあ……」まいったな、というように頭を掻いている。

「でも、何かは考えていますよね？」

「いや、まあ。うーん、いいよ、わかった。けど、明日にしよう。」

あんな事があつて僕も眠いんだよ」　そう言つて真崎は欠伸をする。
「わかりました。こんな遅くにすいませんでした」　奈美香は頭を下げる。

「いいよ、じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

2、

結局、奈美香はなかなか寝付けなかった。そのせいで寝坊してしまった。怜奈に起こされて食堂に行つたときにはもうほとんどの人が来ていた。

猪狩、藤井、怜奈と中井もいる。彼女は従業員と思われる若い男と話している。彼が貴裕だろうと奈美香は判断した。真崎と尾崎は向かい合せて話をしている。事件の事だろう。そのほかには中年の夫婦だけである。

「おはよう」　奈美香は怜奈の隣に座る。挨拶を交わすが口数が少ない。誰もが本調子ではないようだ。

「そういえば、今日、真崎さんと事件の話をするんだけど」　奈美香は思い出した事を言った。

「お、いいな、それ」　藤井が食いついてきた。

「面白そうね」　怜奈も興味を持ったようだ。

「帰るんじゃないかったのか？」　猪狩は興味がなさそうである。

「いいじゃない、別に一日中話をするわけじゃないわよ。今日中には帰るわよ」

「ならいい」

食事中に大竹と年配の刑事、竹口というらしい、その二人がやってきた。

「皆さんおはようございます。今日帰る方もいらつしやると思います。それは構わないのですが、お聞きしたい事がある場合には連絡いたしますので。また、何かお気づきの点があれば遠慮なくおっし

やってください。以上です。失礼します。」
そう言って二人は去っていった。

奈美香は真崎に話しかける。

「あの、昨日のことなんですけど」

「ああ、いいよ。朝食が終わったら僕の部屋に来てくれるかい？
彼らも来るんだろう？」

「はい、お願いします！」奈美香は笑顔を見せる。

「失礼しまーす」奈美香は真崎の部屋をノックする。
しばらくして真崎が扉を開ける。「やあ、どうぞ」

四人は真崎の部屋に入る。すでに荷物が整理され綺麗に片付いて
いた。

「真崎さんも今日帰るんですか？」怜奈が聞いた。

「ああ、仕事があるからね。」真崎は椅子に腰掛ける。四人はベ
ッドの端に腰掛ける。「で、何から聞きたいんだい？」

「真崎さんはこの事件どうお考えですか？」

「どう、ね……」真崎は考える仕草をする。「たぶん内部犯だろう
ね。外の誰かがあの状況を作ったとは考えにくい」四人は頷く。「
あと分かっているのは、誰にもアリバイがないって事かな」

「そうですか？」奈美香は首をかしげる。

「被害者が発見されたのは九時過ぎ、僕が最後に見たのは食事のと
きだから七時半くらい。彼女、お風呂に来た？」

「いえ、来てないです。」怜奈が答える。「私たち、八時過ぎにお
風呂に入りました。」

「お風呂に来たかが確かな証拠にはならないけど、まあ、大体七時
半から、三十分から一時間の間に彼女は殺されたと考えていいよね。
警察が死亡推定時刻を教えてくれれば早いんだけど。その間、何し
てた？」

「えっと、夕食が終わってからは怜奈と一緒にいたよね？」奈美香

は怜奈に確認した。「うん」怜奈はうなずく。

「俺は部屋にいたかなあ？八時半くらいに風呂に入ってたけど」藤井が首を傾げながら言う。

「俺も」猪狩は頷かずに答えた。

「みんな、同じようなものだと思うよ。僕も自分の部屋にいたから」「それじゃあ、誰にでもできるって事ですか？」奈美香は腕を組んで考える。

「そう。だからアリバイからのアプローチは無意味ってこと。煙草吸っていい？」真崎は煙草を取り出す。

「じゃあ、密室のトリックから、それができた人物を割り出すしかないですね」

「そういうこと。賢いね、矢式さん。」真崎は煙草に火をつける。

「そもそもどうやって部屋に入ったか」と猪狩。

「少なくとも窓ではないわね。さすがに被害者も悲鳴を上げるなりしたと思う。だから、外部犯説は消えるんだけど。内部の人間なら何らかの理由をつければ知り合いじゃなくても警戒されずに部屋に入れたんじゃない？」

「親しい人物なら簡単だけど、そういう人が客に中にいた様には見えなかったし、その辺のつながりは警察が調べるだろうね。話を密室に戻そう」

「どんな方法があると思いますか？」

「色々あるよ。一番簡単なのはカウンターのマスターキーを使った。良く考えたらこの鍵があるんだから密室じゃないね」真崎が笑いながら言う。「あの時間ならオーナーは夕食の後片付けをしていたよね」

「それは、無理ですよ」怜奈が反論した。「伯父さんに聞いたんですけど、あ、オーナーの事です。マスターキーは持ち出されないように鍵をかけて保管しているんです。番号式でオーナーしか知らないそうです」

「君、オーナーの姪っ子なんだ？へえ……じゃあ、この方法はオ

「ナーしかできないね」

「でも、伯父さんにはアリバイがあるんですよ」

「いつの間に調べたんだよ？」藤井は目を丸くしている。

「気になったから昨日のうちに調べたの。えっへん」怜奈は笑顔を見せる。「で、アリバイなんですけど伯父さんはその間ずっと夕食の後片付けをしていました。アルバイトの高石君が証言しています。彼もずっと片付けをしていたそうです」

「用意がいいね新川さん。他の人のアリバイとかはわかる？」

「いえ、伯父さんの事しかわかりませんでした。」

「夏美は食堂にいたって言っていたわ。高石君とお話して、それから風呂に入ってたって言うてるから、オーナーと高石君のアリバイは間違いないと思う」奈美香が説明する。

「じゃあ、オーナーとバイトの子には犯行は無理だね。アリバイトリックをつかえば可能かもしれないけど今はおいておこう。夏美って子のアリバイはちよつと薄いな。食堂から風呂までの間が曖昧だ。そうそう、尾崎さんは部屋で仕事をしていたって言っていた。みんな大したアリバイは持っていないね。君たちはどう思う？」

「さっぱりッス」藤井は両手を挙げてお手上げのポーズをする。

「うーん……」怜奈は考え込んでいるようだが答えは出せないでいるようだ。

「マスターキーが使えないとなると鍵なしで外から鍵をかけたことになります。もしくは鍵はかかっていなかった」

「ああ、それおもしろいね。ということは、鍵がかかっていることを確認した尾崎さんと鍵を開けたオーナーは共犯だね」

「オーナーは確実に鍵を回していた」猪狩が否定する。奈美香は舌打ちをする。

「うーん、駄目か……」

「やっぱり鍵はかかっていただろうね。じゃあどうやってかけたかだね」と真崎。

「色々方法がありますね。良くあるのは糸とかワイヤーを使う方法

ですけど」もちろん小説の中の話である。実際に「良くある」かは知らない。

「そんな隙間あったか？」藤井が尋ねる。

「窓なら？ レバーに糸を巻きつけて上の換気扇から外に出して、引っ張ればレバーが上がって鍵が閉まると思うんだけど」

「糸じゃ換気扇のところが摩擦で切れる。ワイヤーだと傷が付くと思う。釣り糸なんかだと無難かもしれないけど、そもそもうまくいくかどうか」またも、猪狩が否定する。奈美香は彼を睨む。

「あんた否定ばかりしないで何か自分で意見出さないよ！」

「いや、特にない」猪狩は素っ気なく答える。奈美香は舌打ちしてもう一度睨む。

「まあ、まあ」真崎がなだめる。「それなら、機械を使った方が良いきがするな。僕はよく知らないけど結構小さなサイズになると思ふよ」

「でも、それなら回収しなきゃいけないですよね？」

「うん、問題はそこだね。誰にも気づかれずに回収しなきゃいけない。あそこにいたのは僕ら以外では尾崎さんとオーナーだね。けど、オーナーにはアリバイがある。かといって尾崎さんもそんなそぶりはなかったと思うよ」

「あの時、まだ犯人がいたとか？」藤井が思いついたように言う。

「それは昨日も出たわよ。康平がずっと見ていたから、それはないわよ」奈美香はきっぱりと否定する。藤井はがっかりしたようだ。それなりに自信があったらしい。

「うーん、そろそろネタ切れかな？」真崎が腕を組んで考え込む。

「今のところそれらしいのはワイヤーで窓の鍵をかけたか、機械で扉の鍵をかけたか。前者なら犯人は一階の部屋の人ですよ。入り口から入ったら鈴の音でわかるから。自分の部屋に窓から入るしかないわ。後者なら尾崎さん……」

「か、ここにいる五人」真崎はイタズラっぽく笑う。藤井と怜奈は驚いたが、奈美香は微笑み返す。猪狩は相変わらず無反応だ。

「一階の部屋は誰がいたかな？」

「えっと夏美ちゃん……」奈美香は考えたが思い浮かばなかった。「武井さん夫婦」怜奈が代わりに答える。これも調べておいたのだろう。何度か見かけた中年夫婦の事だろう。

「ま、どっちにしてもちよつと弱いね。でも、そろそろお開きかな」そうですね。ありがとうございました。」奈美香は頭を下げる。

四人は立ち上がり部屋から出て行こうとした。

「君の意見を聞いてないね。猪狩君」

「……わからないです。」猪狩は答えた。「わかっているのは、重要な何かを忘れてのことだけです」そのまま猪狩は出て行った。

3、

「結局分からなかったわね」帰りの電車の中奈美香は言った。真崎もS市らしいが車で来ていた。なので猪狩、藤井、奈美香、怜奈の四人となった。猪狩はずつと窓から海を眺めている。

「ま、俺ら素人だし。警察に任せるしかなかったんだよ」と藤井。

「けど、悔しいわね」怜奈はそう言ったがすぐに「ごめん不謹慎だね、これ」と言った。人が死んでいるのを思い出したのだろう。

「けど、まだ詰めれそうじゃない？」奈美香が言い出した。「とりあえず、尾崎さんは犯人じゃないと思うの」

「二階にいたからか？」

「厳密に言つとちよつと違うけど。あの時間みんな自分の部屋にいた。だから、犯人は堂々とドアから入った。どいう口実を使ったかはわからないけど。とりあえず疑いを持たれずに部屋に入った。そついう点では尾崎さんにもできる。けど彼の場合、密室にする方法が思い浮かばないのよ。真崎さんが言ったように機械を使ったとしても回収しなきゃいけないし。やっぱり一階にいた人の方がリスクは低いと思うの」

「じゃあ、夏美ちゃんか武井さんたち？ そういえばあの夫婦のこ

と全然わからないよね」

「そう。彼らが一番あやしい。けど一番あやしまれるのに殺したりするかしら？」

「オーナーと高石だけアリバイがある」突然、猪狩が口を開いた。

三人は飛び上がりそうになる。

「うわっ！　びっくりしたお前聞いてたのかよ」藤井が胸に手を当てているよほど驚いたようだ。

「何？　じゃあ、康平はあの二人が共犯って言いたいの？」

「そうは言ってない。それに共犯じゃなくても方法があるかもしれない」

「アリバイトリック？　何かあるかしら？」

「さあ？　それは知らない」そういうと猪狩はまた窓のほうに視線を戻す。

結局、議論はまとまらなかった。S 駅に着くとまず怜奈と別れる。彼女だけ方向が違う。地下鉄に乗り二つ目の駅で藤井が降りた。その次の駅で二人は降りる。歩いて二十分ほどで二人の住む住宅街である。

二人はしゃべらなかった。猪狩はいつも通り黙っていた。ずっと考え込んでいる。

何か忘れている。

いや、間違えているのか。

どっちでも同じか。いや……たぶん忘れている。

なぜ、密室なのか。密室は単に不可能を示しているだけ。誰にもできない、だから自分にもできない。アリバイを確保できないから、そうせざるを得なかっただけだ。

では、どうやって密室にしたのか。何かを見落としている？

うつ伏せの死体、刺さったナイフ。血。テーブルの上、鍵。

被害者を最後に見たのは、夕食のとき？

時計？ 隠してあったと言っていた。そういえば、いつの間にか音が止んでいた。タイマーで止めたのか。

ああ、

そうか。

猪狩は笑った。嘲笑した。

「うわっ！ びっくりした……どうしたの、急に？」 奈美香が睨んでいる。

「いや、別に」 猪狩はまだ笑っていた。

先に奈美香の家に着く。

「じゃあ、また」 奈美香が手を挙げる。

「ああ」

「あんた、なんか思いついたの？」

「いや、別に」

「ああ、そう。じゃ」 首を傾げながら奈美香は家の中へ入っていった。

五分ほどで猪狩の家に着く。

「ただいま」

「お帰り」 母の涼子が迎える。「どうだった？」

「散々だった」

「つまらなかったの？」

「いや」

涼子は首を傾げる。

「ねえ、タウンページある？」

涼子はさらに首を傾げた。

4、

海から帰って来た翌日の月曜日、奈美香は猪狩の家に向かっていた。彼が何か思いついたように思えてならなかったからだ。

奈美香にはまだわからない。いくつも可能性を挙げては消去。その繰り返しである。答えにはたどり着きそうにもない。

条件が足りないのか、もしくは間違っているのか。

そういえば動機は？密室の謎に気を取られて忘れていた。しかし、自分にはわからないだろう。もしかしたら、警察が動機から犯人を割り出すかもしれない。

しかし、まだ先のはずだ。それに、何か動かぬ証拠を見つけられない。犯人の毛髪が見つかるかもしれない。被害者の爪に犯人の皮膚が付着しているかもしれない。そうなれば密室のトリックなど意味を成さないだろう。そう考えると自分達は情報が圧倒的に少ないし、やっている事も無意味に思えてきた。

いや、無意味は百も承知だった。観測された不合理が気に入らないだけの事だった。

そう考えているうちに猪狩の家に着いた。インターフォンを鳴らす。

「はい」女の声だ。おそらく母の涼子だろう。

「あ、おはようございます。矢式です」

「あら、ちよつと待ってね」

しばらくの間、そして扉が開く。

「おはよう。奈美香ちゃん」涼子が微笑む。

「おはようございます、おばさん。」奈美香は頭を下げる。「康平君いますか？」

「それがねえ、朝からどこか出かけていったのよ」

「どこに行ったかわかりますか？」

「わからないのよ。でも昨日帰ってくるなりタウンページ見てたわね」

「そうですか。ありがとうございます。」

タウンページ、何を調べていたのか。真崎の事務所だろうかと奈

美香は考える。やっぱり何かあったのか。奈美香は行ってみる事にした。

四章 解決する表層の結果と解決しない深層の心理について

1、

猪狩はあるビルの前に立っていた。三階建てのビルで、二階の窓には「真崎探偵事務所」と書かれていた。階段を上り扉の前で止まる。一度深呼吸。扉をノックする。

しばらくの沈黙の後「どうぞ」という声。猪狩は中に入る。

部屋の中は整理整頓が行き届いていた。入って左の窓際にはデスク。その前に接客用のソファとテーブル。右側には食器棚と小さなガスコンロがあり、真崎はそこでお湯を沸かしている。

「やあ、やっぱり君だったか」真崎は微笑む。「二十パーセントくらいで矢式さんかなと思ったんだけど」

猪狩は黙っている。

「ここに来たってことは犯人がわかったのかな？」

「ああ」猪狩はそれだけ答える。

「コーヒー飲むかい？ インスタントだけど」

猪狩は何も答えない。

「はあ……」真崎はため息をつく。「その様子だと本当にわかっているみたいだね」

「ああ」猪狩はもう一度答える。「なんで殺した？」

2、

「なんで？ 君がそれを聞くとは思わなかったな。」真崎はコーヒを淹れる手を止めない。「興味がないと思っていた」

「何かしらの弁解が聞けると思っただけ」

「弁解、ね……。ないよ、そんなもの。僕は秋山美冬を殺した。動機はある。けれどそれを人に話す意味があるとは思わない。人を殺した罪は変わらないし、同情も求めていない。それよりも、君がどうやって気づいたか気になるな」

「時計」簡単に答える。

「ああ、あれはまずかった。」

「なんで密室にしたの？」

「ああ、何でだろうね。気づいてほしかったのかな？ 君みたいな誰かに。確かに密室にする事で、事象の不可能性で身を守る事と、気づかれる事によるリスクを天秤にかけてのことではあったけど、賢い人間ならすぐ気づくだろうからね」

そう言ってから真崎は煙草を取り出し、火をつける。「でも実際のところ一番いい殺し方は通り魔に見せかけた殺人だね。けど彼女の場合ガードが固くて無理だったんだ。で、思いついたのが密室通り魔では殺せない。ならこういう閉鎖的環境で殺すしかない、ならば普通に殺すよりは密室殺人の方が安全と考えた。それだけ。ただ、誰かは気づくと思った。そして、それならそれでもいいと思った。」

猪狩は何も喋らない。どう切り出したらいいか、わからなかった。「自首はするよ」猪狩の気持ちを察したかのように言った。

「ばれたから君を殺す。なんてことはないよ。君が気づかなくても自首していたかもしれない。ばれないように色々と細工をしたわけだけど、結局罪の意識から逃れられなくてね」

「じゃあ、なんで……」

「人を殺そうとする人間の気持ちがわかる？」真崎が聞いてくる。論旨がずれていると思ったが、猪狩は答える。

「いや、わからない。わかりたくもない」

「そう。……それが正解だ」

しばらくの間、沈黙。

「彼女も来るのかい？」口を開いたのは真崎だった。猪狩はしばらく考えて、奈美香のことだと判断した。「彼女」とは「She」のことか「Girlfriend」のことか。猪狩は「She」の事だと思う事にした。

「いや、知らない」

「来ると思うよ。たぶん彼女も気づく。彼女の場合頭の回転が速いけど無駄が多い。可能性を片っ端から挙げていくからね。君の倍くらいアイディアがあると思うよ。そして君はあの時一つも意見を出さなかった。それは、意見が無いんじゃないかと少しくも非合理的な意見は排除しているんじゃないかな、って思った。勘だけど。君だつていくつも考えがあつたんじゃないかな？ だから、彼女じゃなくて君が来ると思った」

3、

「たぶん、この辺……」

信号機のある交差点で止まった。膝に手を着き、息を切らしている。

信号が青になった。奈美香は動かなかった。真崎はこちらに歩いてくる。

「ええ」奈美香も微笑み返す。「残念だわ」

「さようなら」 奈美香もそれだけ返す。 奈美香は真崎の背中を見え

なくなるまで見つめていた。

意外とドライなものだと思った。知り合って数日しか経っていないのは確かだが、自分が彼に好意を持っていたのも確かである。理由はわからなかった。案外、自分の感情を自分で理解できるほど人間はよくできているわけではないのかもしれないと思った。

「よお」後ろから声がした。

「あ、康平」

「おう」

沈黙。何を話せば良いかわからなかった。もつとも、猪狩は話す気すらないかもしれない。

「帰ろうか」猪狩はそれだけ言った。

「うん」奈美香は頷く。なんだか、安心した気がした。

4、

「いや、全然わからないんだけど」

四人は藤井の部屋にいた。彼はアパートに一人暮らしである。海で飲めなかった酒を飲んでしまおうということだった。先ほどの台詞を発したのは藤井である。

「私もわからない。」怜奈が頷く。「どうやって真崎さんが？」

「簡単だよ」猪狩が答える。「テーブルの上にあった鍵はあの部屋の鍵じゃなかった」

「え？」二人は驚きを隠せない、いや隠す気はないだろう。

「あの鍵は別の鍵で、あの部屋の鍵は彼が持っていた。それで鍵をかけて、第一発見者になって鍵を元に戻す。探偵という職業なら、場を仕切れると踏んだんだろう。誰も部屋に入れずに隙を見て鍵をすり替えた。たぶんハンカチで鍵を取ったときだろうね。その中に本当の鍵が入っていた」

「だから、夕食のときに探偵だって言ったのよ。私が聞かなくても、自分から話していたでしょうね」

「でも、どうやって部屋に入ったの？」怜奈が首を傾げる。

「推測だけ」と前置きして「被害者は真崎が探偵だと言ったときに反応してこつちを見た。探偵に相談したい事があつたんだろう。そしてそう仕向けたのはたぶん真崎本人」

「なるほど、でもどうして？ 動機は？」

「それは知らない。真崎は通り魔に見せかけて殺すにはガードが固すぎた、と言っていたから、彼女は殺される事を自覚していたんだろう。それ程のことをしていた。そして、その対象が真崎だった。それと、例えば、そのことで脅迫状かなんかを送れば探偵に相談したがるんじゃないかな」

「なるほど、警察には言えないしな」藤井は感心している。怜奈も頷いている。奈美香はわかつていいる、といった顔をしている。

「全部推測だよ」

「そもそも、どうしてわかつたんだ？」

「時計が鳴った」

「時計？ ああ、やつぱりあれって時計だったの？」

「ということは死体に気がついてほしかったということだと思った。そうしないと鍵をすり替えられないから」

「でも、ちよつとずさんよね。時計を鳴らすなんて不自然すぎるもの」奈美香はふと思いついた。

「気づいてほしかった」

「え？」

「そう言っていた」

「よくわからない。密室にまでしておいて、気づいてほしかったって……」

「わからないのが普通だ。俺たちは人を殺した事がないからな」

「まあ、そうだけど……」

「はいはい、もうやめ。犯人は捕まつたし、トリックもわかつたし、もうこの件は終わりにしよう。せっかく飲んでるんだから、くらい話はやめようぜ」藤井が提案する。三人もそれに賛成する。結局、物騒な話なんてしたくはないのだ。

エピソード

翌日、猪狩は昼近くまで寝ていた。

「うえ……頭痛え。二日酔いだ……」時計を見ると十時五十二分。

「水……」呻きながらベッドから起き上がり、一階へ向かう。

「おはよう」猪狩は台所にいた母・涼子に挨拶をする。

「こんにちは」涼子は微笑む。猪狩にはその表情が皮肉っぽく見えた。言葉も然り、こんな時間まで寝ているなということだろう。何も言い返せなかったので黙って食器棚からコップを取り出し、冷蔵庫の水を注ぐ。そこでインターフォンが鳴った。

「はいはい」涼子は今のほうへと向かう。

猪狩は、日本人は不思議だと思った。返事をして聞こえないのに返事をする。それに相手には見えないのに電話の相手にお辞儀をしたりするのも一緒だ。あれはどういう心理なのだろうと考えたが、二日酔いで頭が痛いので中断。

「はい、ええ……はい」涼子は受話器で話をしている。受話器を置くと玄関のほうへ歩いていった。

今日は何をしようか、というか何もしたくない。気持ちが悪い、奈美香が無理矢理飲ませてきたせいだ。今日はずっと寝ていようかなどと考えていると涼子が猪狩の方にやってくる。

「あんた、何したの？」涼子が神妙な顔で聞いてくる。

「は？」猪狩は何の事だかわからない。

「警察」

「へ？ 何もしてないよ、俺」

「知らないわよ。あんたに用があるって」

訳もわからないまま、立ち上がり玄関へ向かう。

「ちよっと、着替えてからにしないさい！」涼子が叫んだ。

「どうも、道警の伊勢と言います」伊勢は今に通されソファに座っ

ている。猪狩は座布団に座って向かい合っている。

涼子が麦茶を運んでくる。

「あ、お構いなく」伊勢は片手を挙げる。

「で、何の用ですか？」猪狩は棘々しく言った。今日は気分が悪いのだ。そこに警察なんかが来ては、たまったもんじゃない。

「ごめんね、すぐ終わるよ」

「ただの二日酔いですから、お構いなく」涼子が言う。猪狩は涼子を睨むが気にせず部屋を出て行った。

「まあ、和哉の事なんだけど」伊勢が話を切り出した。

「和哉？」

「ああ、真崎って言った方がいいかな？」

「あ、はい。知り合いたったんですか？」

「知り合いつて言うか、親友だね。そして過去形でもない」伊勢は微笑んだ。「アイツはいいやつだったよ。いや、いいやつだよ。あいつは人殺しだけど、いいやつで、俺の親友であることに変わりはない。もちろん彼のやったことは許されることではないけど、いいやつであるということとは無関係だ。わかるかな？」

猪狩はわかった、ような気がした。もし、奈美香や藤井、怜奈が人を殺したら同じ事を言うだろうか。

「たぶん」とだけ答えた。

「そう、それは良かった」伊勢はにっこりと笑った。

「で、どうして来たんですか？ 彼は自首でしょう？ 俺には関係ないと思うんですけど」

「うん、今日は非公式だから。和哉が自首する前に電話があつてね。びっくりしたよ、人を殺したから自首するって。で、その時、君のことを聞いたわけ。なんとなく嬉しそうだったよ」

三十分ほど話して、伊勢は帰っていった。現場からは特に重要な証拠は残っていなかった。指紋も毛髪も皮膚も検出されなかった。時計とナイフからウラを取れるかもしれないが、時間がかかりそう

だ、自白だけじゃ立件できないから大変だと言っていた。

証拠が無かったのに彼は罪を認めた。やはり彼は自分の罪の重さに耐えられなかったのだろう。

動機も言っていたが猪狩は忘れてしまった。人が殺人を犯す事になった経緯など興味はなかった。（ただし、それは殺人という行為を軽視しているという意味ではない。殺人は世界に容認されてはならず、動機は関係がないという事である。）大体は猪狩の想像した通り、個人的な恨みから（と言っても彼と秋山美冬とは面識がなかった。親族を巻き込んだ事件に彼女が関わっていたようである）殺す機会をうかがっていたといった内容だったと思う。そのために探偵になったとも言っていた気がする。警察は彼女が関わっていた事件も捜査しなおすとのことだ。

人を殺そうとする人間の気持ちがわかる？ 真崎はそう聞いてきた。

わかりたくない。そう猪狩は答えた。

それが正解。彼はそう言った。彼は正解を知っていた。しかし、彼は正解することはなかった。そして実行してしまった。

殺人という不正解を。

それは、とても悲しいことに思えた。

エピソード（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございます。
何か思いついたらまた書こうかと思っています。その時は文章的にもトリック的にも成長できていたらなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6632i/>

それが正解

2010年10月8日15時13分発行